

資料（一） 「源氏物語画帖」台紙貼込状況一覧

△凡例▽

- 一、「源氏物語画帖」（本目録番号1）の台紙に記された各帖名と、貼り込まれた粉本の場面を一覧にした。
- 二、各帖名には五十四帖の中の通番を付し、台紙に粉本以外の墨書がある場合これを示し、□には注記を示した。
- 三、各粉本には五十四帖の中の通番を付し、該当場面を描いた画帖中の粉本を紙片番号で示した。□には解説中に用いたグループ名及び零葉番号（算用数字使用）を示した。
- 四、粉本がないもの、墨書のための粉本がある場合は△▽によって示した。

第01紙表（3空蟬）	↓△粉本無し▽
第01紙裏（4夕顔・墨書）	↓10賢木（02 ₂ 〔B〕），11花散里（02 ₁ 〔B〕）
第02紙表（5若紫）	↓05若紫（03 ₁ 〔A〕），05若紫（03 ₂ 〔A〕）
第02紙裏（6末摘花）	↓06末摘花（04 ₁ 〔3〕）
第03紙表（7紅葉賀）	↓07紅葉賀（05 ₀ 〔13〕），07紅葉賀（05 ₁ 〔E〕）
第03紙裏（8花宴）	↓08花宴（06 ₁ 〔E〕）
第04紙表（9葵）	↓02帚木（07 ₂ 〔1〕），07紅葉賀（07 ₁ 〔14〕）
第04紙裏（10賢木）	↓06末摘花（08 ₂ 〔A〕），07紅葉賀（08 ₃ 〔G〕）
第05紙表（11花散里）	↓07紅葉賀（09 ₃ 〔A〕），08花宴（09 ₂ 〔A〕）
第05紙裏（12須磨〔欠失〕・墨書）	↓03空蟬（10 ₁ 〔B〕）
第06紙表（13明石）	↓13明石（11 ₂ 〔A〕），13明石（11 ₃ 〔G〕）
第06紙裏（14霽標）	↓05若紫（12 ₁ 〔B〕），14霽標（12 ₂ 〔A〕）
第07紙表（15蓬生〔絵合から書直し〕）	↓02帚木（13 ₂ 〔B〕）

第07紙裏（16関屋）	↓△粉本無し▽	05若紫（13 ₃ 〔B〕），43紅梅（13 ₁ 〔C〕）
第08紙表（17絵合）	↓△粉本無し▽	
第08紙裏（18松風）	↓03空蟬（16 ₂ 〔8〕），18松風（16 ₁ 〔C〕）	
第09紙表（19薄雲・墨書）	↓19薄雲（17 ₂ 〔7〕），19薄雲（17 ₃ 〔A〕）	
第09紙裏（20朝顔）	↓20朝顔（18 ₁ 〔A〕）	
第10紙表（21少女）	↓23初音（19 ₂ 〔4〕）	
第10紙裏（22玉鬘）	↓05若紫（20 ₁ 〔5〕）	
第11紙表（23初音）	↓46椎本（21 ₁ 〔F〕）	
第11紙裏（24胡蝶）	↓10賢木（22 ₁ 〔F〕）	
第12紙表（25蛩）	↓17絵合（23 ₁ 〔E〕）	
第12紙裏（26常夏）	↓41幻（24 ₁ 〔6〕）	
第13紙表（27篝火）	↓30藤袴（25 ₁ 〔C〕）	
第13紙裏（28野分）	↓28野分（26 ₁ 〔C〕）	
第14紙表（47総角）	↓47総角（27 ₀ 〔11〕）	*この頁重複錯簡
第14紙裏（48早蕨〔欠失〕）	↓48早蕨（28 ₀ 〔12〕）	*この頁重複錯簡
第15紙表（29行幸）	↓△粉本無し▽	
第15紙裏（30藤袴・墨書）	↓△粉本無し▽	
第16紙表（31真木柱）	↓31真木柱（31 ₂ 〔A〕）	
第16紙裏（32梅枝）	↓32梅枝（32 ₁ 〔A〕）	
第17紙表（33藤裏葉・墨書）	↓33藤裏葉（33 ₁ 〔C〕），33藤裏葉（33 ₂ 〔A〕）	
第17紙裏（34若菜上）	↓34若菜上（34 ₁ 〔C〕），34若菜上（34 ₂ 〔A〕）	
第18紙表（35若菜下）	↓35若菜下（35 ₁ 〔C〕），35若菜下（35 ₂ 〔D〕）	
第18紙裏（36柏木・墨書）	↓△粉本無し▽	
第19紙表（37横笛）	↓37横笛（37 ₁ 〔2〕）	
第19紙裏（38鈴虫）	↓△粉本無し▽	
第20紙表（39夕霧・墨書）	↓39夕霧（39 ₁ 〔A〕）	
第20紙裏（40御法）	↓40御法（40 ₂ 〔C〕），△墨書・40御法（40 ₁ ）▽	
第21紙表（41幻）	↓40御法（41 ₁ 〔D〕），41幻（41 ₂ 〔A〕）	

第21紙裏	(42 匂宮)	↓	41 幻 (41.3 [D])
第22紙表	(43 紅梅)	↓	42 匂宮 (42.1 [D])
第22紙裏	(44 竹河)	↓	44 竹河 (44.1 [A])
第23紙表	(45 橋姫)	↓	46 墨書・45 橋姫 (45.1) v
第23紙裏	(46 椎本)	↓	46 椎本 (46.1 [C]), 46 椎本 (46.2 [D])
第24紙表	(47 総角)	↓	47 総角 (47.1 [D])
第24紙裏	(48 早蕨)	↓	49 宿木 (48.1 [C])
第25紙表	(49 宿木)	↓	49 宿木 (49.1 [D])
第25紙裏	(50 東屋)	↓	50 東屋 (50.1 [D])
第26紙表	(51 浮舟)	↓	01 桐壺 (51.2 [A]), 01 桐壺 (51.4 [A])
第26紙裏	(52 蜻蛉)	↓	01 桐壺 (51.1 [B]), 51 浮舟 (51.3 [A])
第27紙表	(53 手習)	↓	37 横笛 (53.2 [C]), 41 幻 (53.3 [C])
第27紙裏	(54 夢浮橋)	↓	42 匂宮 (53.1 [C]), 53 手習 (54.2 [C])
第28紙表	(白紙)	↓	02 帚木 (55.1 [10]), 10 賢木 (55.2 [C])
第28紙裏	(白紙)	↓	06 末摘花 (56.4 [B]), 14 滯標 (56.3 [B])
第29紙表	(白紙)	↓	50 東屋 (56.2 [B]), 54 夢浮橋 (56.1 [B])
第29紙裏	(白紙)	↓	54 夢浮橋 (56.1 [B])
第30紙表	(白紙)	↓	54 夢浮橋 (56.1 [B])
第30紙裏	(白紙)	↓	54 夢浮橋 (56.1 [B])
第31紙表	(白紙)	↓	54 夢浮橋 (56.1 [B])
第31紙裏	(白紙)	↓	54 夢浮橋 (56.1 [B])

凡例

- 一. 「源氏物語画帖」(本目録番号1)に描かれた粉本の画題場面を源氏物語の内容に従ってならべた。粉本にない場面は割愛している。
- 二. 場面概略の末に記したのは岩波書店『新日本古典文学大系』の『源氏物語』五巻による該当部分を示し、"巻数頁"でその先頭箇所を示している。
- 三. 場面概略の末に(絵詞)とあるのは、該当する場面が『源氏物語絵詞』に収録されていることを示す。『絵詞』の詞と粉本の画面に多少のズレがあっても、場面設定が近似していれば採っている。
- 三. ■で示したのは、該当場面を描いた画帖中の粉本を紙片番号で示した。資料(一)により、紙片番号前に台紙番号を表記するのは割愛した。□には解説中に用いたグループ名及び零葉番号(算用数字使用)を示した。
- 四. ↓は、主な近世土佐派の画帖作例のうち、該当場面を採用しているものを示したが、絵画化には構成要素の違いや時間のズレを見せることがあり、必ずしも図様の一致を表わすものではない。★印はここに上げた作例中に該当場面が見出せないことを示している。略称は以下の通りである。

- 久保惣本 〓 「源氏物語色紙絵」(土佐光吉/和泉市久保惣記念美術館蔵)
- 京博本 〓 「源氏物語画帖」(土佐光吉・長次郎/京都国立博物館蔵)
- 徳川本 〓 「源氏物語画帖」(土佐光則/徳川黎明会蔵)
- フリア本 〓 「白描源氏物語画帖」(土佐光則/米・フリア美術館蔵)
- バーク本 〓 「白描源氏物語画帖」(土佐光則/米・バークコレクション蔵)
- 任天堂本 〓 「源氏物語画帖」(土佐光則/任天堂株式会社蔵)
- 堺市博本 〓 「源氏物語色紙絵」(土佐派/堺市博物館蔵)
- 個人蔵本 〓 「源氏物語画帖」(土佐光起/個人蔵)
- 根津本 〓 「源氏物語画帖」(伝土佐光起/根津美術館蔵)

01 桐壺

● 秋の夜、帝の命により歎負命婦が、亡くなった桐壺更衣の里邸にその母を見舞い、文を奉る。(岩波新1・011)(絵詞)

■51.4 [A] ↓フリア本

●清涼殿での源氏加冠の儀式。左大臣が加冠の役を務める。(岩波新1.024)(絵詞)

■51.1 [B]・51.2 [A]

↓久保惣本・徳川本・任天堂本・堺市博本・根津本

△02帚木▽

●五月雨の夜、源氏の宿直所に頭中将、左馬頭、藤式部丞らが集い、女性論議をする。(岩波新1.036)(絵詞)

■07.2 [1] ↓久保惣本・徳川本・個人蔵本・根津本

●左馬頭の話に、ある殿上人に同行したところ、御簾の内の女の琴に合わせ、簀子に腰掛け笛吹く男がいた。(岩波新1.050)(絵詞)

■55.1 [11] ↓久保惣本・京博本・バーク本・任天堂本・堺市博本

●源氏、一夜を明かした空蟬を障子口まで見送る。(岩波新1.070)(絵詞)

■13.2 [B] ↓徳川本

△03空蟬▽

●紀伊守邸で源氏、小君の手引きで空蟬と軒端萩が碁をうつ姿を垣間見る。(岩波新1.085)(絵詞)

■16.2 [8] ↓京博本・任天堂本・根津本

●紀伊守邸で源氏、小君の手引きで空蟬と軒端萩が共寝する部屋に忍び入る。(岩波新1.089)

■10.1 [B] ↓徳川本・個人蔵本

△04夕顔▽

●乳母の家に訪れる源氏、隣家の垣に咲く夕顔を隨身に折らすと、内より童女が花を載せる扇を差し出す。(岩波新1.101)(絵詞)

■49.2 [A] ↓久保惣本・バーク本

●六条御息所を訪れた翌朝、源氏、送りに出た中将の君を振り返り、歌を交わす。(岩波新1.109)(絵詞)

■10.2 [B] ↓久保惣本・京博本・徳川本・堺市博本・根津本

△05若紫▽

●源氏、北山の僧都の坊で、逃げた雀を追って縁先に出た少女(紫上)を垣間見る。(岩波新1.157)(絵詞)

■03.2 [A] ↓京博本・任天堂本・根津本

●源氏、尼君の僧都の坊を訪ね、少女の素性を聞く。(岩波新1.161)(絵詞)

■03.1 [A] ↓フリア本

●物思いに悩み眠れぬ源氏、侍女を介して尼君と歌の贈答をする。(岩波新1.164)

■13.3 [B] ↓徳川本

●尼君亡きあとの紫君を訪ねる源氏、少女を引き寄せ膝の上に休ませようとする。(岩波新1.185)

■12.1 [B], 20.1 [5] ↓徳川本

△06末摘花▽

●春の朧月夜に常陸宮邸を訪ねる源氏、命婦の手引きで姫君(末摘花)の琴を聞く。(岩波新1.206)(絵詞)

■08.2 [A] ↓バーク本

●冬の夜に末摘花邸を訪ねる源氏、格子を叩くと女房が迎え入れる。(岩波新1.223)

■56.4 [B] ↓徳川本・個人蔵本

●源氏、常陸宮邸の門を翁に開けさせる。(岩波新1.227)(絵詞)

■04.1 [3] ↓★

△07紅葉賀▽

●朱雀院行幸の日、源氏、紅葉の中に頭中将と青海波を舞う。(岩波新1.240)(絵詞)

■05.0 [13], 05.1 [E], 07.1 [14] ↓堺市博本

●藤壺との恋に悩む桂姿の源氏、気晴らしに笛を吹きながら紫君の居間を覗く。(岩波新1.255)(絵詞)

■08.3 [G], 09.3 [A] ↓フリア本・根津本

△08花宴▽

●桜花の宴の果てた月夜、源氏、弘徽殿の細殿で歌を口ずさむ女（朧月夜）に逢う。（岩波新1・276）（絵詞）

■09・2 [A] ↓京博本・任天堂本・個人蔵本・根津本

●右大臣邸の藤花の宴、招かれた源氏、捜し当てた朧月夜と几帳ごしに手を取り歌を交わす。（岩波新1・283）（絵詞）

■06・1 [E] ↓久保惣本・徳川本

△09葵▽欠

△10賢木▽

●晩秋の野宮に六条御息所を訪ねた源氏、榊の枝を御簾の中に差し入れ歌を交わす。（岩波新1・344）（絵詞）

■02・2 [B] ↓久保惣本・京博本・徳川本・任天堂本・堺市博本

●藤壺を慕う源氏、塗籠の口と屏風の隙間を伝って藤壺の室に忍び入ろうとする。（岩波新1・361）

■55・2 [C] ↓根津本

●斎宮となった朝顔のもとに、雲林院に籠る源氏より榊に結ばれた文が届く。（岩波新1・368）

■22・1 [F] ↓個人蔵本

△11花散里▽

●五月雨の晴れ間に源氏、霊景殿女御を訪ね、昔話をする。（岩波新1・397）（絵詞）

■02・1 [B] ↓徳川本・バーク本・任天堂本・堺市博本・個人蔵本・根津本

△12須磨▽

●左大臣の女房中納言の君、一夜を過ごした源氏が帰りぎわに桜を眺めるのを見送る。（岩波新2・008）

■10・3 [B] ↓徳川本・個人蔵本

△13明石▽

●明石入道の館に移った源氏、初夏の夕月夜に琴を奏で、入道がこれに感じ入

る。（岩波新2・064）（絵詞）

■11・2 [A] ↓久保惣本・京博本・徳川本・個人蔵本

●源氏、明石の君との離別を間近にして琴を弾く。入道は箏を明石の君のいる御簾の内に差し入れる。（岩波新2・083）（絵詞）

■11・3 [G] ↓根津本

△14潯標▽

●源氏、明石の君からの手紙を心中穏やかならぬ紫上に見せる。（岩波新2・108）

■12・2 [A] ↓個人蔵本・根津本

●病のため出家した六条御息所を見舞い古宮を訪ねた源氏、几帳の隙間に前斎宮を垣間見る。（岩波新2・119）（絵詞）

■56・3 [B] ↓徳川本

△15蓬生▽欠

△16関屋▽欠

△17絵合▽

●藤壺の前で絵合せを催す。女房たち、左右に分かれて絵を競う。（岩波新2・175）

■23・1 [E] ↓徳川本・任天堂本・根津本

△18松風▽

●大堰の山荘から帰る源氏を乳母が明石姫君を抱いて見送る。（岩波新2・203）（絵詞）

■16・1 [C] ↓徳川本・バーク本・根津本

△19薄雲▽

●源氏、大堰の山荘に姫君を引き取りに訪れる。明石の君は姫君との別離を悲しむ。（岩波新2・220）

■17・1 [A] ↓★

●大堰の山荘を訪ねようとする源氏、先立って紫上のもとに立ち寄る。その裾に姫君、まわりつく。（岩波新2・225）（絵詞）

■17・2 [7] ↓任天堂本・堺市博本

●藤壺女院の死を悲しみ、念誦堂に籠る源氏、夕陽を眺めて物思いに耽ける。
(岩波新2・232)

■17・3 [A] ↓根津本

△20朝顔▽

●二条院の雪の日、源氏、朝顔の姫君に嫉妬する紫上をなだめる。
(岩波新2・267)

■18・1 [A] ↓フリア本

△21少女▽欠

△22少女▽欠

△23初音▽

●女童が庭で小松を引く子の日、明石の姫君を訪れた源氏、明石の君が姫君に贈った手紙と鶯の細工を見る。(岩波新2・380) (絵詞)

■19・2 [4] ↓京博本・バーク本

△24胡蝶▽欠

△25螢▽欠

△26常夏▽欠

△27篝火▽欠

△28野分▽

●野分の過ぎ去った朝、玉鬘のもとを訪れる源氏、玉鬘と親密に語らう様子を夕霧垣間見て驚く。(岩波新3・047) (絵詞)

■26・1 [C] ↓徳川本・個人蔵本

△29行幸▽欠

△30藤袴▽

●秋、出仕間近の玉鬘、諸方より懸想の文が届くが、笹の枝につけた螢兵部卿

宮からの文にのみ返事をする。(岩波新3・102)

■25・1 [C] ↓徳川本

△31真木柱▽

●雪の夜に玉鬘を訪れようと香を燻き染める髭黒大将、北の方は大将にやおら火取りの灰を投げかける。(岩波新3・121) (絵詞)

■31・2 [A] ↓久保惣本・京博本・フリア本・バーク本・個人蔵本

△32梅枝▽

●春、明石姫君の裳着の前夜、六条院に螢兵部卿宮らが訪れ、源氏、薫物競べを行う。(岩波新3・155) (絵詞)

■32・1 [A] ↓フリア本

△33藤裏葉▽

●三月二十日大宮の命日に内大臣ら極楽寺に参詣。同行した夕霧の袖を内大臣が引き、謝罪する。(岩波新3・177)

■33・2 [A] ↓★

●四月、想いを遂げた夕霧より雲井雁のもとに後朝の文が届く。内大臣らとこれを読む。(岩波新3・184)

■33・1 [C] ↓徳川本

△34若菜上▽

●雪の早朝、女三宮のいる六条院より紫上のもとに帰った源氏、格子を叩くが、女房たちはしばらく開けない。(岩波新3・244) (絵詞)

■34・1 [C] ↓バーク本・任天堂本

●梅に鶯の鳴く雪の朝、源氏、梅の枝に文をつけて女三宮のもとに贈る。
(岩波新3・245) (絵詞)

■34・2 [A] ↓フリア本

△35若菜下▽

●柏木、猫好きの東宮に女三宮の唐猫を所望させ、東宮よりその猫を預かる。

(岩波新3・312)

■35・2 [D] ↓バーク本

●源氏、病後の紫上とともに蓮の花が盛り池を眺め、歌を詠み交わす。
(岩波新3・378) (絵詞)

■35・3 [A] ↓フリア本・個人蔵本

●小侍従、柏木からの文を密かに女三宮に見せているところへ、源氏が戻ってくる。
(岩波新3・380)

■35・1 [C] ↓徳川本

△36 柏木▽

●春、柏木を亡くした落葉宮を心配し、一条宮を訪ねる夕霧、一条御息所と語る。
(岩波新4・033) (絵詞)

■54・1 [C] ↓徳川本

△37 横笛▽

●六条院を訪れた夕霧、三宮と匂宮がその膝に抱かれようと争う。
(岩波新4・060)

■37・1 [2], 53・2 [C] ↓★

△38 鈴虫▽欠

△39 夕霧▽

●三条殿を発ち一条の宮に向かう夕霧。雲居雁は夕霧の脱ぎ捨てた単を引き寄せ涙を流す。
(岩波新4・146) (絵詞)

■39・1 [A] ↓★

△40 御法▽

●三月、二条院で法華経供養を行う紫上、桜花の下で舞う蘭陵王を感慨深く眺める。
(岩波新4・164) (絵詞)

■41・1 [D] ↓京博本・バーク本・任天堂本・個人蔵本

●夏、明石中宮と匂宮の見舞いを受ける紫上、匂宮に大人になっても庭の紅梅と桜を慈しむよう頼む。
(岩波新4・168)

■40・2 [C] ↓徳川本

△41 幻▽

●正月、紅梅を見て紫上を偲ぶ源氏、螢兵部卿とのみ歌を交わす。
(岩波新4・186) (絵詞)

■41・2 [A] ↓フリア本

●紫上の遺した文を読んで泣く源氏、歌を書き付けたのち焼かせてしまう。
(岩波新4・204)

■41・3 [D], 53・3 [C] ↓京博本・バーク本・個人蔵本

●咲き始めた梅に雪の降る年の暮れ、源氏、仏名会の導師の僧をねぎらう。
(岩波新4・205)

■24・1 [6] ↓任天堂本

△42 匂宮▽

●正月、夕霧主宰の還饗の宴が梅薫る六条院で行われる。女房ら物陰より覗き見る。
(岩波新4・224) (絵詞)

■42・1 [D], 53・1 [C] ↓バーク本・個人蔵本

△43 紅梅▽

●参内しようとする若君に笛の稽古をさせる按察大納言、宮の姫君にも琵琶を合わせるように勧める。
(岩波新4・237) (絵詞)

■13・1 [C] ↓フリア本

△44 竹河▽

●蔵人少将、庭の桜を賭けて碁を打つ玉鬘の姫君らを垣間見る。勝ち方の童女、庭に下りて花を拾う。
(岩波新4・266) (絵詞)

■44・1 [A] ↓久保惣本・フリア本

△45 橋姫▽欠

△46 椎本▽

●薫、宇治の八宮邸を訪ね、悲しみに沈む大君と歌を詠み交わす。
(岩波新4・361)

■46・2 [D] ↓バーク本

●薫、亡き八宮の居間に入り、柱にもたれ歌を詠む。女房ら、その姿を覗き見る。(岩波新4・371) (絵詞)

■21・1 [F], 46・1 [C] ↓徳川本

●新年に、阿闍梨から山菜などの贈り物が八の宮の姫君らに届く。(岩波新4・372)

■02・3 [B] ↓徳川本

△47総角▽

●秋八月、宇治を訪ねた薫、大君に迫るがつれなく拒まれる。(岩波新4・390) (絵詞)

■11・1 [C], 47・1 [D] ↓バーク本

●薫、勾宮を訪ね、遣水に月の映る秋の庭を眺めながら、宇治の姫君たちの話題など語り合う。(岩波新4・409)

■27・0 [10] ↓徳川本・フリア本・個人蔵本

△48早蕨▽

●薫、勾宮のもとを訪れ、庭前の紅梅を愛でつつ箏を奏でる宮に、紅梅の枝を折り歌を詠みかける。(岩波新5・006) (絵詞)

■09・1 [C] ↓フリア本

●中君転居の前日、宇治を訪れた薫は、悲しみにうち沈む中君を慰め、歌を詠み交わす。(岩波新5・012)

■28・0 [12] ↓バーク本

△49宿木▽

●菊がまだ盛りのころ、女二宮の降嫁を考える帝、薫を碁の相手として清凉殿に召し寄せる。(岩波新5・031)

■49・1 [D] ↓バーク本

●早朝、薫は自邸に咲く朝顔を摘んで二条院を訪れ、中君を見舞う。

(岩波新5・040) (絵詞)

■48・1 [C] ↓徳川本

●宇治を訪れる薫、長谷詣でからの帰路宇治橋を渡る浮舟の車を見る。

(岩波新5・109)

■12・3 [9] ↓★

△50東屋▽

●若君を愛でる勾宮夫婦を、中将君覗き見る。(岩波新5・144) (絵詞)

■56・2 [B] ↓久保惣本・徳川本・フリア本

●二条院で浮舟を見つけた勾宮、障子を開けて裾を捉えようと、浮舟は扇をかざしながら振り返る。(岩波新5・155) (絵詞)

■50・1 [D], 52・1 [C] ↓バーク本・個人蔵本

△51浮舟▽

●春の日を浮舟と睦まじく過ごす勾宮、男女が寄り臥す絵を描き浮舟に見せる。(岩波新5・209) (絵詞)

■51・3 [A] ↓★

△52蜻蛉▽

●法華八講の果てた夏の夕暮れ、薫、薄物を着た女一宮や小宰相らが氷を持って涼むさまを垣間見る。(岩波新5・297) (絵詞)

■52・2 [C] ↓久保惣本・任天堂本

△53手習▽

●秋の小野の里、月夜に妹尼は琴を少将尼は琵琶を弾く。浮舟は自身の生い立ちを述懐する。(岩波新5・340)

■54・2 [C] ↓バーク本

●秋の小野の里、尼君のもとに身をよせる浮舟、少将尼と碁を打つ。(岩波新5・356) (絵詞)

■02・4 [B] ↓徳川本・個人蔵本

△54夢浮橋▽

●横川の僧都を訪ねた薫、浮舟入水後の事情を知り、小君に託する文を依頼する。(岩波新5・397) (絵詞)

■08・1 [C], 56・1 [B] ↓徳川本・バーク本

△凡例▽

「源氏物語画帖」(本目録番号1)の粉本墨書に源氏物語本文から和歌が抄出されたものは、その全文を示し、「新編国歌大観」における番号を示した。

第01紙裏 (02・0) 04 夕顔

吹き迷ふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな

△源氏・49▽

第09紙表 (17・1) 19 薄雲

入日さすみねにたなびくうす雲はもの思ふ袖に色やまがへる

△源氏・305▽

第14紙表 (27・0) 47 総角

女郎花さけるおほ野をふせぎつつ心せばくやしめを結らむ

△源氏・659▽

第14紙裏 (28・0) 48 早蕨

見る人もあらしにまよふ山里にむかしおほゆる花の香ぞする

△源氏・689▽

第15紙裏 (30・0) 30 藤袴

朝日さすひかりを見ても玉笹の葉分の霜を消たずもあらなむ

△源氏・404▽

第17紙表 (33・0) 33 藤裏葉

とがむなよ忍びにしほる手もたゆみ今日あらはるる袖のしづくを

△源氏・446▽

第18紙表 (35・1) 35 若菜下

夕露に袖ぬらせとやひぐらしの鳴くを聞く聞きてゆくらむ

△源氏・497▽

第23紙表 (45・1) 45 橋姫

泣く泣くもはねうち着する君なくはわれぞ巢守になるべかりける

△源氏・621▽

第28紙表 (55・1) 02 帚木

木枯しに吹きあはすめる笛の音をひきとどむべきことの葉ぞなき

△源氏・13▽